

須賀川市立小中一貫教育校「稲田学園」令和2年度学園だより

# とう りん 稲 雲

第22号

令和3年2月26日発行

発行者：校長 小貴 崇明



## ○2分の1成人式～前期ブロック修了の節目として～



2月19日(金)、4年生の「2分の1成人式」を実施しました。前期ブロック(1～4年生)が修了するという節目の儀式となりました。

最初のうちは、自分たちだけで進める行事に緊張していたようですが、クイズや合奏、10歳の宣言とプログラムが進むにつれて

しっかりと話せるようになっていきました。そして、最後には保護者の皆さんに向けて感謝の気持ちをしたためた手紙を子どもたちがそれぞれ渡して式が終わりました。これからの目標や夢に向かってがんばりたいことなどを堂々と話せた4年生たちが少し大人に見えました。

(写真左は、10歳の宣言をする児童、右はハンドベルやパイプを使った全員合奏)

保護者の皆様におかれましては、お忙しい中参観していただきありがとうございました。

## ○なわとび記録会～日に日に伸びる自分を感じながら～

2月13日(土)の深夜に発生した地震のために実施を延期した1～6年生の「なわとび記録会」を、2月17日(水)に実施しました。3学期当初から各学年で発達段階にあわせた跳び方を課題にして、昼休みや各家庭で練習を積み上げてきた子どもたちは、時間をかけてきただけあって自信を持って跳んでいるように感じました。ミスすることなく長い時間、より多くの回数を跳び続けられた児童には、同級生から大きな拍手が送られていました。



## ○特設陸上部の練習開始～「チーム稲田」として切磋琢磨を～



新型コロナウイルス対策による部活動停止期間が終了したことをうけて、稲田学園特設陸上部を結成し、2月22日(月)より朝練習をスタートしました。

練習初日は、7、8年生20名で体育館において練習を行いました。4月からは新7年生も練習に参加する予定です。令和3年度の5月12日(水)に開催予定の「中体連岩瀬支部陸上大会」、そして9月2日(木)の「支部駅伝大会」に向けて各自が目標をしっかりと意識した練習を積み重ねていってほしいと思います。(写真は、体育館でダッシュをする生徒たち)

## ○ユネスコ世界平和作文コンクール～稲田学園がトリプル受賞！～



第36回ユネスコ世界平和作文コンクールの結果が発表され、小学校の部、中学校の部の両方において最高賞である「日本ユネスコ協会連盟会長賞」を、なんと本校5年・●●●●君、9年・●●●●●さんがダブル受賞いたしました。さらに、中学校の部においては稲田学園が「学校賞」も受賞しました。まさにトリプル受賞の快挙です。

受賞した二人の作文は、ウルトラFMで紹介されますので、放送予定などをご確認いただき、ぜひ聴いていただきたいと思います。

(写真は、受賞した作文の朗読を録音する二人)

## ○稲田学園だから～小学生が身近な中学生に質問できる～

2月12日(金)朝、8年生2名が5年生教室を訪れました。実は、5年生で「ヘアドネーション」という制度について話題になり、実際に稲田学園でもその制度に取り組んだ8年生がいるということで、今回その8年生の2名が自分たちの取り組んだ「ヘアドネーション」について説明してくれました。



「ヘアドネーション」とは、小児がんや先天性の脱毛症、不慮の事故などで頭髪を失った子どものために、寄付された髪の毛でウィッグ(医療用かつら)を作り、無償で提供する活動のことです。8年生の2名は、ヘアドネーションに興味をもっていた5年生に対して、実際の体験をとおして学んだことや感想などをわかりやすく伝えていました。同じ学校内の身近な先輩の言葉に5年生は感動し、興味を持った児童もいたようです。

### ★ことばのちから(22)「授かりもの」ではなく「預かりもの」

最近、尊敬する校長先生がこんな話を紹介してくださいました。

○小学3年生のとき、木の実を取ろうとして下から石を投げていたら、その石が友達の頭に当たった。母親は子どもを連れて先方の家に謝りに行った。子どもが何かやらかしたら親が頭を下げて謝る。その「姿」を息子に見せなければと思った。そのとき、「あんなことをしたからお母さんが謝らなきゃいけないでしょ！」と子どもを叱ってはいけない。親が言うべき言葉は「大切なことを学んだね」だけでいい。

母親が謝りに行ったとき、先方の親が言ったのは「この傷、どうしてくれるんですか？」ではなく、「お互い様ですよ。うちの子だっていつ同じことをするかわからないですから」だった。その言葉がありがたくて涙が出た。それを聞いた父親、「もし逆の立場で相手の親が謝りに来たら、私も『お互い様です』と言おう」と心に決めた。結婚してから7年、子どもを諦めていた頃に生まれた息子だ。子どもは天からの「授かりもの」ではなく、「預かりもの」であるという。

「預かった子どもは社会にお返しする。そのとき、たくさんの人のお役に立てる人間に育てあげることが親の役割であり、たくさんの人から『君が必要だ』と言われることが子どもにとって一番幸せなことです」と父親は言う。・・・『日本一心を揺るがす新聞の社説』より

学校もたくさんの子どもを預かる場所。幸せな子どもを育てたいと強く思います。